

名著に学ぶ経営学 ～ その4：歴史から学ぶ

言うまでもなく歴史は経営学の宝庫である。西洋であればギリシアのヘロドトスの「歴史」、これは紀元前5世紀にギリシアが大国ペルシアによる侵略を撃退したペルシア戦争を描いたものであるが、小アジアに栄えたリディア王国より筆を起し、新興国ペルシアに征服されたいきさつ、ペルシアがバビロニア、エジプトを征服し、いよいよギリシアに侵攻し、ついに撃退されるまでの長大な記録である。それぞれの国の事情や登場する人物達の思いが克明に描かれている。それらの中からおのずと成功や失敗の法則が導き出せる。また、リヴィウスによる「ローマ建国史」も興味深い。狼に育てられた兄弟が国を興すという伝説から始まり、それに続く6人の王、王政が倒され共和国となったいきさつ、それからは近隣諸国を征服し空前の大国になっていく過程が描かれる。残念なことに140巻中現存するのは20巻までと35から45巻であるが、ハイライトであるカルタゴのハンニバルとの対決は圧巻である。これまた成功、失敗の事例集であり、かのマキャベリも論考を行っている。

中国の歴史も最高である。まずは司馬遷の「史記」。神話の時代から、殷、周、秦、漢初までの歴大な歴史で、しかも紀伝体という人物の伝記が中心のスタイルである。王や皇帝、宰相や将軍から、任侠、盗賊に至るまで網羅されている。彼らの国の治め方や戦争の仕方から経営のノウハウを得る事が出来る。続く「漢書」「後漢書」は長期政権である大帝国の歴史であるから、我々中小企業者としては感覚が異なる。次の時代の「三国志」は明代に「三国志演義」としてフィクションを加えた小説は非常に面白いが、歴史書としての三国志は非常に乱雑でわかりづらい。ただヒーロー化されていない等身大の治世者達は欠点も併せ持ち、むしろ身近に感じられて参考になる。

日本の歴史書にもそれらに劣らない物もある。最古の歴史書である「日本書紀」は、神話に始まっているが、聖徳太子の活躍から、大化の改新、壬申の乱を経て天武天皇の代で平和が訪れるまでの流れは大変ドラマティックである。人物達の思いも西洋や中国に劣らない。聖徳太子にしろ中臣鎌足にしろ、天智、天武の両天皇にしろ、国を思う情熱や事を成功に導く見事なテクニックなど、誇張して描かれている部分はあるにせよリーダーの鏡である。しかし、その後の国史は単なる記録になってしまい経営者として得る物は少ない。むしろフィクションが混ざるにせよ「平家物語」や「太平記」の方が国の治め方や戦争の仕方から学ぶことが多い。「吾妻鏡」も素晴らしいが歴大な書物である。戦国時代では「信長公記」「太閤記」「徳川実紀」などに残されている三人の英傑の言行は、日本のリーダーたちの教科書的存在である。江戸時代に頼山陽が「史記」を模してまとめ上げた「日本外史」は、文字通り「史記」に匹敵する偉大な歴史書である。平氏から徳川氏に至る武家政権の興亡がまとめられているが、山陽一流の人物評や歴史感にはまったく頷かされる。また、幕末から明治初にかけて岡谷繁実によって書かれた「名将言行録」も、戦国時代の名将たちの数々の言行がまとめられてあり、われわれ経営者にとっても、素晴らしい参考書である。